【「熊本の心」推進協議会賞】

じいちゃんは負けてない

山鹿市立鹿本中学校　１年　川野　逞

今年の４月、僕は悲しい体験をした。大好きなじいちゃんともう二度と会えなくなってしまったのだ。だけど、じいちゃんは最後まで、かっこいい生きざまを見せてくれた。

じいちゃんは令和２年６月、急に体調が悪くなった。膵臓癌だった。家族みんな絶句した。じいちゃんも不安だったはずなのに、「癌なんかに負けんぞ。心配するな。じいちゃんは強いんだから。」そう言って悲しむ家族を何度も励ましていた。離れて暮らすじいちゃんは僕が小さい頃から「逞の声を聞くと元気が出る。」と言ってくれていた。だから闘病中も僕の声が聞きたいと何度も電話をかけてきてくれた。そのたびに僕も励まし応援した。コロナの影響で入院中の面会はできない。だから動けるうちに僕の家に泊まりに来てくれた。体力が落ちているから布団から起き上がる時も手を引っ張ってあげた。体力をつけるために散歩も付き添った。そんな日は長くは続かず、じいちゃんが僕の家から帰る日になった。「じいちゃん頑張るから。負けないから。」そう言って力強く握手して抱きしめてくれた。僕も泣きながら抱きしめかえした。じいちゃんは家に帰ってからも体が許す限り仕事をした。肺や肝臓にも癌が転移してしまい、家にいる時は体がきつくてずっと寝ている。なのに仕事の時間になったらビシッと仕事モードになる。家族が「仕事やめていいんだよ。」と心配で言っていた。だけど仕事している時は「辛い事も忘れられる。」と言って辞めようとはしなかった。だから、余命宣告を受けるギリギリまで働いた。余命宣告は１週間から１ヶ月。それを聞いた僕のお母さんは泣いた。「お父さんは何も悔いはないよ。幸せだったよ。楽しかったよ。だから泣かんでいい。」一番辛いはずのじいちゃんがそう言って励ましていた。それからのじいちゃんは日に日に弱っていく。コロナで面会できないこのご時世を何度も悔やんだ。そんな中、朝早くばあちゃんから連絡があった。今日が峠だと。ばあちゃんは特別付き添いを許された。携帯をじいちゃんの耳元にあててもらい返事はないが、何度も声をかけた。翌朝、僕が学校に登校する前にも電話をかけた。「行ってきます。頑張ってくるね。」そう言った瞬間、電話の向こうから心電図の音が鳴りだした。ばあちゃんが慌てた様に電話を切り、その後すぐに亡くなった事を知った。

葬儀には沢山の人が来てくれた。じいちゃんの人望や偉大さを改めて知った。そんな中、「あんなに頑張っていたのに癌に負けてしまって残念です。」と言った人がいた。だけど自分が辛い状況の中でも弱音を吐かず精一杯闘ったじいちゃんは本当に強かった。かっこよかった。だから、「じいちゃんは負けてない」僕はそう思っている。そして僕は、じいちゃんのような強い男になりたい。